

寄稿 ● 2
企業の「リアル」を知る、課題解決型授業

「失敗経験」を伴う産学協同PBLが
学生の「気づき」と主体性を引き出す

主体性は教えられるものではなく、「答えのない」課題と立ち向かうことで身につく。アクティブラーニングで成長するためには、「自ら何かを得る」という積極的な姿勢が必要。

株式会社ベネッセコーポレーション大学事業部 / FSP研究会 事務局長

平山 恭子

「主体的な学び」を身につけた人間が未来を創る

「なぜ大学で学ぶのか。こんなシンプルな問いに即答できる学生は少ないように感じる。『社会で求められるのはどのような人材か』。これを明確に理解している学生もそう多くはない。

自分に足りない知識や能力に自ら気づき、「卒業までに何を身につけるか」を考え、主体的に学ぶことができる。そんな学生を増やすことができないものか。

我々、一般社団法人Future Skills Project研究会（以下FSP研究会）は、「大学は社会で求める人材を輩出できていないのではないか」という声が根強いことを課題として、2010年7月に6企業5大学による議論の場をスタートさせた。その議論の末、「課題解決力やコミュニケーション能力なども重要だが、そのような能力を発揮するための基盤となるエンジンが『主体性』であり、これこそ大学の学びで引き出すべきものである」との結論に至った。

しかし、主体性は教えられて身につくものではない。そこで、学生が「答えのない」課題に対してゼロから考えてやり抜く体験が必要であると考え、まずは「講座」という形で実践を重ねてきた。

主体性を引き出すFSP講座とは

FSP研究会が実践する講座（以下FSP講座）

講座を終えた学生たちは、「自分の持っている知識と能力を全部出し切った」「初めて知識を使ってみる」という経験をしたりと口々に言っていた。それらの発言は、「リアル」な企業課題に対して、大学入學段階で持ち得る知識と思考力の全てを持って向き合い、能力を出し切った様子をうかがわせた。また、彼らは、「自分に足りていない知識や能力が分かった」「もっと勉強したい」という学びへの意欲の高まり、までも口にした。そして、大学で「答えのない課題を解決する高次思考能力獲得の場であり、更なる成長の機会が授業にある」ということを理解し、その後の履修行動や授業の受け方を変えていった。

さらに特筆すべきは、受講後の学生の行動基準自体が、彼らが講座を通じて得た自身の考えや体験に基づいたものになったということだ。それは「誰かが言ったから」「世間で言われているから」などという受け身な姿勢ではなく、「自分には欠けている知識だから」「自分が得たいスキルだから」という主体的なものである。この姿勢の変化が、大学での学び方のみならず、サークルやアルバイトなどのあらゆる大学生活の中で、自らがどう行動すべきかを考えて実践するだろうという力強さを感じさせてくれた。

主体的な行動がもたらした「覚悟」

FSP講座での実践を続けて4年。この講座を1年生の前期に受講した学生が、2015年3月末に大学を卒業して社会の一員となる。彼らがどのように就職活動を乗り越え、自らの進路を選択したのか、昨年11月にインタビューを行った。FSP

では、学生が5〜7人でチームを組み、全14コマを前半と後半に分け2つの企業課題に取り組み。1つの課題に取り組み期間は5週間。最終回で課題解決策を企業にプレゼンテーションする。

一般的に、このような産学協同のPBL型授業は3〜4年生の演習やゼミで導入されているケースが多い。しかし、FSP講座は原則として1年生の前期に実施している。これには、入学直後に自分が足りないのかという「気づき」をもたらす、大学での学びの重要性を理解させ、4年間の学びへの意欲を高める狙いがある。

また、この狙いを達成するために最も重視するのが「失敗経験」だ。FSP講座では、知識・技能の未熟な入学したての学生が企業のリアルな課題に取り組みため、ほとんどのチームが十分な成果を発揮することができない。当然企業から厳しい指摘を受け、大半の学生は落ち込んでしまう。一般的なPBL型授業はここで終わりだが、FSP講座はここから本番である。すぐに後半の企業課題が提示されると、どのチームも前半の反省を踏まえてより深く議論し、チーム活動にも工夫が表れる。つまり、一つの講座の中で、「失敗→反省→概念化→実践」という学びのサイクルが回るのだ。

「気づき」「覚悟」がもたらす意欲の高まり

我々が最も驚いたのは、FSP講座を履修した学生たちの見せた変化である。

講座で「主体的」に行動した経験が、その後の彼らにどのような影響を与えたのだろうか？

インタビューに応じた学生に共通するのが、自分で考えて決めたという「自己決定感」だ。彼らは、自らの思考や体験に裏付けられた明確な理由と価値観で進路を決めていた。また、いずれの学生も、社会に出る「覚悟」を決めていた。「自分で決めた進路だから、やるしかない」「不安もあるし失敗もするだろうけれど、本気でやりたい」という等身大の彼らの言葉。そこから我々が学んだことは、主体的な行動こそが学生の「自己決定感」につながり、彼らの「覚悟」を支えているということだ。自らの人生を自分事と捉え、状況に対して主体的に考えて対峙しようとする……まさしく、この講座が社会で求められる人材輩出のきっかけになっていたことを、5年間の活動を経て気づくことができた。

アクティブラーニング型授業は

「ただ」履修するだけでは何も変わらない

FSP講座では、学生自身の「気づき」を大切にしている。講座の冒頭では、履修する学生に対し、「この講座では何かを『与えてもらう』、あるいは『教えてもらう』のではなく、自分から何かを『得て』欲しい」と念を押している。これは、他のアクティブラーニング型授業でも同じことが言えるのではないか。

自分に不足しているスキルや能力を常に考えながら参加し、自分で何かをつかみ取る。このような姿勢があつてこそ、アクティブラーニング型授業を履修する本当の意味があるのではないだろうか。



平山 恭子(ひらやま きょうこ)
1998年、株ベネッセコーポレーションに入社。高等学校向け事業に従事。その後グループ会社ベルリッツ・ジャパンへ出向。3年間のマネージャー職を経て2006年に帰任。グローバル人材育成のための英語アセスメント開発に5年間従事したのち、2010年7月、Future Skills Project研究会の立ち上げに参画。2014年4月、研究会組織を一般社団法人化し、事務局長に就任。産学連携講座のための教材の開発や、教員研修、講演活動など多数。

※PBL: Problem-Based Learning、Project-Based Learningなどの略。グループで課題やプロジェクトに取り組み、知識の習得に加え汎用的な能力・スキルの獲得を目指す授業形態。

FSP研究会の活動の様子は、下記ホームページでご覧いただけます。
<http://www.benesse.co.jp/univ/fsp/>